

# J.G.ズルツァー著『子どもの教育と教授に関する 試論（増補第2版）』

## Ⅲ

上 畑 良 信

### 第5章 子どもの心情を育成する方法に関する一般的諸規則

われわれが持つ何らかの善い性質を、人に説いて教え込もうとする際に用いる二つの方法というものがある。すなわち、「訓諭」(Lehre)による方法と、「模範」(Exempel)による方法とである。人の話に注意深く耳を傾ける者に、私が人間の一定の性質を取り上げてそれについて分かりやすく説明し、そしてなぜそれが秀でているかを示してみせるなら——または選りすぐりの言葉でその性質について熱意を込めて賛美してみせるなら——相手は聞かされた話に惹き込まれ、その性質への共感で満たされることになる。この方法をとりわけ活用しているのが、キリスト教諸徳への恭順を熱心に教え諭す説教師である。もう一つのやり方は、人びとの目ざす理想のあり方を優れた模範の表象の力をかりて伝えようと努めるときの方法である。その方法とは、われわれが他人にその実行を強く願う徳性について、実際の人物を模範〔または手本〕にして明らかにするやり方である。その際、学ぶ側は一人の他者を手がかりにして、人がどのようにして徳のある振舞いを行なうかを観察する。学び手は有徳の行為の卓越した効用を実際に眼前で見ることになり、この方法は模範に倣い従う意欲を彼のなかに駆り立てることになる。このように訓諭よりも模範の方が、人の心情に感銘を与えやすいことは、一般的にもよく言われていることである。そして、それが真実と見なされる理由は、きわめて容易に見出されるものと私にも思われる。訓諭は叙述的な説明〔の働きかけ〕であるが、それに対して模範は、いわば生き生きとした絵画のような実際的な表象を人に生じさせる働きを持つ。単なる叙述的説明よりも、一幅の絵の方が、あるいはまた美しい田園の本物の眺望の方が一層強い印象を与えるように、訓諭と模範もこれに相似した関係にあると言

えるだろう。一般に他の方法よりも模範によって教える方法がより優れていると認められる理由として、以上のことをまず初めに挙げておこう。

他方でまた、模倣するということが人間存在にとってほぼ共通に認められる傾向性であるということもよく言われる。少なくとも、子どもの時代は間違いなくそうした時期に該当する。それゆえに、模範は先に挙げた長所とともに、さらに別の利点を持つ。つまり、子どもは模範を目にすると何か不思議な力が働いてその真似をせざるをえない状態へとつき動かされてしまうのである。このことは〔日常的な出来事の中で〕非常にしばしば観察されることである。子どもは、彼らがともに過ごす両親または他の人びとの流儀〔所作・作法〕を、気づかないうちに自らのものとして取り入れている。それだから、本当に分別があり、有徳で礼儀をわきまえた人びとの社会の中に子どもをいつでも加えておくことができるなら、われわれはさほど努力をしなくても彼らに立派な教育を与えることができるだろう、という思いがこれまでたびたび私の脳裏に去来した。というのは、そのような条件が整うところでは、訓諭は行なわなくても子どもは着実に育つだろうと思われたからである。

それに加えて、「模範」はまた、訓諭にはない別の利点を有している。模範は何かを教えようとする当事者の思惑を、もともと表面上は相手にそれと感じ取らせない見掛けを備えている。〔他方で、〕心情はその固有の特性から言って大変誇り高く、そのためにわれわれが力づくで一定の事柄を誰かに教え込もうとしても、それに心情が気づいたならばたちまちのうちに傷ついてしまうことが頻繁に生じる。人の心情というものは、一切を手中に収めて意のままに動かしたいものなのである。それゆえに、何をどうすべきかについてあたかも本人が自分の意志で行なっていると勘違いする程度にまで、十二分に訓諭の働きかけを整えることができているなら、学習者の態度が頑なになることが珍しくないのである。こうした着眼から、プルタルコス<sup>①</sup>は哲学の諸説を異なる種類の肉と魚に喩えている。詩人ピロクセノス(Philoxenus)<sup>①</sup>の詩句を引用して彼が言うには、最も肉の風味を感じさせないものが実に肉の中で最も美味なものなのであり、そして最も魚の香りを感じ取らせないものが魚の中で極上のものである、と。それだから、プルタルコスはこう述べる。哲学者によって注目されることの最も少ない哲理の教えの方が、最も多く感銘を与えることは確かなのだ、と。模範も、それに倣って言えば、これとよく似た働きかけの特長を有するというわけである。

こうしたことから導き出されるのは、一般に訓諭よりも模範の方が心情に一層よい影響を与えるということであり、そして子どもにはできる限り模範を示して教えるように心掛けなければならないということである。だが、こうした教え方には多

様な方法があるはずであり、その種々あるやり方をここで事例を挙げて示し、簡単な説明を加えておくのも無用なことではないだろう。

第一の最も重要な方法は、身近な人との関わりの中で生きた模範から習うやり方である。そのような子どもと大人との日常的な関わりを、しかも子どもに身につけて欲しい諸性質を既に備え持った人たちを通して準備することができるなら、子どもはそこでの人間関係を通してだけでも、とても善い人へと成長することであろう。およそ人は自国の人びとの礼儀作法を自ずと身につけて育つことは、誰でもよく知っていることである。フランス人はフランス人の作法を、イギリス人はイギリス人の作法を持っている。そのことはその国々の自然的特性に由来するというよりは、人びとの人間関係がその発生の源である。そもそも、ごく一部の人を除くなら、いつも身近で関わっている人びとのやり方とは異なった慣習、異なった感覚、そして異なった意見をわれわれが持ちうるということはほぼ考えられないだろう。まったくごく僅かの人間だけが達しうるような見事な円熟へと、天賦の強みを活かして自己形成を果たすことのできる事例がまれにあるにせよ、そんな人は特別に秀でた精神の持ち主なのである。というのも、ごく普通の人びとの場合、心情はある意味で機械的〔または習慣的〕な手順を経て育成されるからである。彼らが普段知っている他の人びとがそうするから、彼らもそのように考えるし、そのように感じるし、そう振舞うということなのである。

だが、さらにここで付け加えておかなければならないのは、日々の関わりを持つ人びとがわれわれの愛する人であるときに、その交わりが心情に最も強い影響をもたらすということである。この場合、模範はわれわれからある特別な能力を引き出す。誰かを愛する者は、単に打算的な駆け引きから、その愛する相手の作法に心惹かれるのではない。そうではなく、ある種の不可思議な力が彼の内部で働いて、相手を真似て同じようになりたいという模倣欲求を惹き起すのである。このように子どもというのは彼らが模倣への最も強い傾向性につき従っている時期にあるので、それゆえ人が彼らを生きた模範によってどのようなことに興味づけようと望むとしても、それはきわめてたやすくできるほどなのである。

このことから、教育において十分すぎるほどの考慮が払われなければならない一つの一般規則が導き出される。「子どものために分別があり、有徳で礼儀をわきまえた人びとの日々の関わりをその周りに用意してやれるように、われわれはいつでもできる限りの努力を果たさねばならないということである。そして、もしも周りの人びとがそのような人でない場合には決して子どもを彼らに委ねないように、子どもが幼い頃からすべての両親は注意するように努めてほしいということであ

る。』

子どもが最初に出会うのは乳母と両親、そして雇いの教師〔私教師〕のいる社会である。彼らの関わりによって子どもが駄目にされないように心掛けるべきとするなら、まずはその両親が分別のある人でなくてはならない。そしてまた、教師と養育係もそれと同様、分別のある人でなくてはならない。もし、その努力をしないで子どもが立派に育つというのであれば、それはほとんど驚嘆すべき御業と言うべきなのである。しかしながら、われわれはこうした人たちが同時に揃っている子育ての場を、いったいどこに見出すであろうか。子どもたちにとってよい模範となるような分別のある両親が、はたしてどれほど多くいるだろうか。われわれがここで求めているような教師や奉公人を見出し、報酬を支払うことのできる両親を探し求めるとして、どれほど多くいるだろうか。こうした状態を改善する手段が見出せない状況では、困難ばかりが大きいことは私にもよく分かっている。かりにわれわれが次の事柄を訴え出るとしてみよう——まずは国家に対しては、教育に対する彼らの責任を引き受けさせ、非力で貧しい両親から子どもを預かって、理性的で選りぬきの人びとの世話に委ねるように対策を講じてほしいと訴え出るとしたらどうだろうか。はたまた、富裕者に対しては、きちんとした人びとを貧しい親の子どもの周辺に置くために、彼らのなしうることのすべてを行なってほしいと願い出るとしたらどうだろうか。けれども、〔私の推測では、〕これらのことをわれわれが切望したところで、結局のところそれに対してはただの夢物語と突き放されて終るだけのことであろう。現在の立法者には古代ローマ人のようにもっと賢くあってほしいと、これまで私は再三再四強く願ってきた。その古代ローマでは、市民法で先に定められた彼らの当然の諸義務を市民が守るのを見届けるために、すべての都市に一人の監察官〔風紀取締官のケンソル〕を置いていた。しかし、〔われわれの時代には〕それに代わって子どものしつけのための行政監督者を配置し、制約のない強制力によって両親にしつけを命じる権限を彼らに与えることができるとするなら、その方がたぶん〔上に挙げた夢物語と見なされる提案よりも〕もっと望ましいことであろう。

模範によって教える第二の方法は、範例を生き生きと目に浮かぶように表現するし方、つまり物語による方法である。物語には事実そのものが与えるような印象の強さは確かにないものの、書き手の技巧によっては大変心を打つものとなり、生身の実例よりも一層強い感銘を与えることが可能なのである。われわれが本当の歴史物語であれ、創作された物語であれ、そうしたものを作り出す場合、巧みな筆力を駆使すれば読み手をきわめて強く感動させることができる迫力、そして魅力を与え

ることが可能なのである。物語は人が工夫して案出することができ、そして子どもに相応しい最適なものに整えることができるものである。物語ではすべての状況設定を自在にでき、われわれが思い描く人の活動を、おそらく現実には目にすることができないであろう程度にまで、大層魅力的に描出できるのである。従って、この模範教示の方法は、最初に挙げたものと比べて二つの優れた長所を持っている。すなわち、物語の写実性と感動性がそれであり、それに題材の選択性がなおも加わる。実際の人との交わりにおいては、人はそのつど出会う相手を否応なく模範として受け入れねばならないのに対し、物語では人物を選びすぐった上で彼らを最も相応しい姿に自由に形象化することができるからである。

また、上手に構成された演劇も、物語と同様の範疇に属する。演劇は日々つきあっている人びとの人生を、範例として目の前で演じて見せてくれる上に、さらにまた物語の長所をも兼ね備えている点で優れたものである。

ここから再びまた、われわれは次の実践的規則を導き出すことができる——「教育においては実録物でも創作でもよいが、多量にある立派な出来事から題材を採り、上等に仕上げられた物語を用意して子どもに与えられるように、十分に配慮しておかなければならない」という規則である。そして、そこには次の読み物が含まれるべきであろう。(1) 新旧の物語作家が書き記した、徳性の模範的例話を含むさまざまな本当の出来事〔歴史叙述、伝記など〕から成る作品集。(2) 子どもの成長状態に見合うように適切に仕上げられた〔小説などの〕創作された出来事から成る作品集。(3) 同様にまた模範として活用されるべき、偉大な人物たちの会話を収録した道徳対話集。

第一の、事実に基づいた物語から成る作品集は、プルタルコス<sup>(2)</sup>の著作だけからでも簡単に編成できるであろう。他の新旧の歴史作家をさらにそこに加えてみるなら、百冊もの精選された物語を集めて、子どもに頗る素敵な模範を提供しうる選集を容易に作ることができるであろう。その場合に、教師はそれを子どもたちに読ませて道徳的な善美 (Schönheit) [の素晴らしさ] を感じ取らせるのに専念すればよいのである。第二の創作された出来事の選集は、卓抜な才のフェヌロン (Fénelon)<sup>(3)</sup> がブルゴーニュ公<sup>(4)</sup>の教育のために創作した物語の書き方に倣って編成されるべきだろう。そして、まだ小さな子どものためには、小説『パミラ』(リチャードソン著)<sup>(5)</sup>の第4部に見られる叙述法を採用するのがよいだろう。後者については、のちにまた一つの範例を私は挙げてみたいと思っている<sup>(6)</sup>。だが、対話集の方はルキアノス (Lukianos)<sup>(7)</sup>のやり方に従って構成されるのがよいだろう。そこでは会話だけでなく、実に巧みな演出で活躍する人物たちが登場するのだから。これらの対

話篇はソクラテス的な方法に拠るのもよいし、フォントネル氏 (Fontenelle) <sup>(8)</sup> の構成法に従うのもよいが、どちらの場合でも既に成人になった人にとって大いに役立つものとなるだろう。ただ、ダイアログそのものは模範の役割で必要とされるというより、訓諭の手段として活用する上で欠かせないものなのである。もしも立法家が、青少年の教育のためにそのような書物を技量のある人びとに報酬を払って創作してくれるなら、彼らは自らの祖国に一体どれほどの利益をもたらすことになるだろうか。だが、〔実情に目を向けて言えば、〕立法家たちは子どものしつけが国家の福利にきわめて大きな影響を与えるということを、まるでまったく知らないかのように見えるのである。

第三の模範による方法は上述したものになかった、間接的に教え諭すという特長を持つものであり、それはイソップ寓話を使うという方法である。寓話は自らが公正で偏りが無いと思っている読者に、それまで自分とまったく縁がないと見なしていた事柄について馬鹿にさせ、非難させ、そして嫌悪させるように迫る作りになっている。だが、〔寓話を読み終えてみると、〕意外にも読者は彼が非難していたのは実のところ自己自身の姿に他ならなかったとたちまち知る羽目になる。その結果を受けて、それでもなお自分は無関係だとごまかし逃れようとするのなら、その人はきわめて稚拙な読者であるにちがいない。確かに寓話のもっぱら善くない行為の事例を示し、そして人の過ちを正すのに役立つという効用が一般に期待されてきたものである。しかし他方で、われわれはそれとは違って、過ちの例話よりも諸徳目の重要性を一層力強く際立たせる種類の寓話を書き上げることも可能である。〔ローマの詩人作家〕パエドルス (Gaius Julius Phaedrus) の「ライオンと旅人」の寓話では慎み深さが描かれ、「鼯鼠の木を選ぶ神々」の寓話では英知が秀逸なやり方で叙述されているように、例えを挙げればそのように作るやり方である<sup>(9)</sup>。このような寓話の形式に倣って、われわれは子ども向けの特別な選集を創作しなければならない。そうすれば、子どもらが後から思い出すことができるように、寓話を彼らが完全に記憶してしまうまでたびたび読んで聞かせたり、語ってみせたりするものを仕上げるのである。そのためには、かなり多くの範例を取り上げ収録できるようにしておくのがよいのである。

次に、子どもの心情に働きかけるのに活用できる「訓諭」について述べると、それには根拠を示すものと根拠を示さないものとの二種類がある。根拠を示さない訓諭においては、〔一つの例を挙げるなら〕人びとの「世評」(Ansehen) がそのまま根拠の効力に代わる役目を果たしていることに気づく。両親または教師は幾度でも何らかの徳性について子どもに話してやり、選りすぐりの言葉と熱情を持ってそれ

を称えてみせるなら、話を聞いた子どもはだんだんとその徳性に対する尊重の念を抱くようになる。彼らは自分が頗る頻繁に聞かされてきた事柄について、その真实性を疑うようなあつかましいことはしない。善良なローマ・カトリックのキリスト教徒が、敢えて教皇の不謬性について疑うことをしないのと同じように。こうした訓諭のやり方は、たとえ知的な厳密さを少しも伴わない性質のものであろうと、立派に効力があるものなのである。人間はその自然本性に起因する性質から言って、たいていの認識は経験的な知識から得ることは必定であるのだから、彼らに対して機械的なし方でそれを教えざるをえないとしても、まったく何も教えないよりはずっとよいのである。それでも、やがて彼らが優れた知性を身につける年齢になれば、それ以前にはただ経験的に知っていただけの事柄について、その根拠を踏まえただで事柄の素晴らしさをだんだんと理解することができるようになるはずである。それだから、彼らがまだ十分な知的能力を身につけていない段階では、いずれにせよわれわれはそのようにするより他にし方がないのである。とはいえ、子どもが理性によって推論する力を持ち、そして理性に常に従うことができるようになれば、当然ながら私はこの教え方を勧めたいとは考えていない。<sup>(10)</sup>

「それゆえに、われわれが教育において心掛けなければならないことは、人が子どもたちに植えつけたいと願う徳性や傾向性を、最善の褒め言葉を用いて機会あるごとに称揚する努力を惜しまないことである。」

その際、大人のそのような会話は直に子どもに向けた会話である必要はない。誰かが他の人と話しているのもであっても、子どもはそれを聞くことで十分に効果はあるのである。実際のところ、人が話すことを子どもが聞いている場合でも、われわれの側がまるでそれに気づいていないかのような振りをするならば、しばしば一層好ましい作用をもたらすであろう。あなたがたが自分の子どもたちに勇気と勇敢さを教え込みたいならば、毎日勇敢な人たちのことを語り、その人たちの徳性に大いに感銘を受けているように振舞うことである。人びとが勇敢さによって獲得した名誉と尊敬について話してやり、彼らに対する羨望を示してやるなら、子どもは確実に心を動かさずにはいられないであろう。敵から負わされたきわめて過酷な責苦のただ中で、未開の先住民アメリカ・インディアンが死にもの狂いで発揮した並みはずれた勇敢さの源泉はどこにあるかと問われるなら、彼らが若いときから聞いていた剛毅さの訓諭や称揚を措いて他に理由があるとは思えないであろう。この範例が示しているのは、人間の自然本性はそのような能力を内在しているのであり、われわれが子どもたちと適切に交わりを持つことができるなら、それらの能力を彼らの中に呼び醒ますことができるということなのである。

ここでもう一度繰り返しておかなければならないのは、子どもの周囲にいる人びとが、誠実で分別のある人たちであることがいかに重要かをわれわれがしっかりと理解することなのである。子どもたちは、たとえ考えることが実に不得手だとしても、周りの人が話したことはすべてよく分かっているものである。しかしながら、たいていの場合、雇いの養育係や奉公人、それ以上にまた教師自身でさえも、彼らが徳性および真の賞賛に値する事柄についていい加減な理解にとどまっているために、褒めるべきところを叱り、または罰し、逆にまた叱るべきところを褒めたりしているのである。それだから、子どもたちが耳にする会話は、いつでも本当に根拠に基づいた正しいことであるべきなのである。そうでないと、彼らは大量の間違った諸概念を身につけてしまい、後からどうにかしようとしてもほとんど取り除くことができなくなってしまうのである。ごく僅かの偏見といえども、一人ひとりが自ら身につけてきた偏った考え方がその大もとの出所である。要するに、それらは教育が子どもたちに植えつけてきたものなのである。こうした根拠を疎かにしない教え方が〔一から見直されて〕広く浸透していくなれば、それとともに数限りのない偏見もやがては消えてなくなることであろう。

だが、これらのことに加えて、われわれが子どもたちにさらに次のような教育を用意してやることができるとしたら、大変素晴らしいことであろう。それは子どもたちをさまざまな分別ある人びとのいる社会の中に頻繁に加え入れて、人びとの会話や話し合いに耳を傾けながら彼らが生活できるようにすることである。われわれの昨今の教育のやり方では、きちんとした人びとのいる社会での交わりが教育の本質的な要素であるにもかかわらず、その中に子どもたちを参加させることはあまりなされていないのである。この点で、プルタルコスがリュクルゴス (Lykurgos)<sup>(11)</sup>の生涯に関する書において伝えている古代スパルタのラケダイモン人のやり方は、非常に優れたものであった。スパルタの地で青少年の周囲にいて、遊びの場においてさえもずっと彼らに目配りをしていたのは、経験豊かな年老いた人びとだったのである。誰もが集まって共同で行なわれた食事の際にも、「最も偉い人は誰だろうか」「こうしたあれこれの行為についてどう考えたらよいか」、等々の有益で重要な質問を彼らはたえず子どもに投げかけていた。このようにして、若者たちは実に優れたやり方で教えを受けていたわけである。このような慣習は、〔やり方しだいであれわれの時代においても〕再び取り戻すことは容易にできるであろう。そのためにはすべての学校で賢明な教師団が組織され——この教師団は行政監督者と学校教師たちが作る組織になるのだが——、その集団の交わりの中に若者が加わり、そこで生活を共にしながら食事も遊びも成員全体で協力して行なうようにしていくなら、

こうした慣習の再興も可能になることであろう。

次に、根拠を伴わない訓諭の一つに挙げられるものとして、さらに「訓戒」(Ver-mahnung)を加えておこう。訓戒を行なう場合でも理由づけが必要になることはしばしばあるにせよ、その根拠は事柄の本質を吟味した上で正確な理性的推論を用いて導き出すようなものではない。そうした場合の根拠は概ね「人間本性の論証」<sup>(12)</sup>から導き出されるものであり、悟性ではなくわれわれの傾向性に根拠を求めるべきものである。例を挙げるなら、「お前がこれを行なうなら、きっとそのことで人から敬意を払われたり、そのことで何らかの得をするだろう」の言い方に見られるように。なるほど訓戒は言われたことの反対をしたがる傾向性を有する者の場合には、さしたる大きな印象を与えることはできないように思われる。また、訓戒によってその人の傾向性を直ちに抑制することができないであろうことも確かである。加えてまた、訓戒は過度にたびたび繰り返されすぎると、最後には子どもがそれに慣れてしまい、注意を十分に払うことがなくなってしまうだろう。それだから、私の考えでは、訓戒を同じようなし方でしばしば繰り返してはいけないのである。そうでなければ、それはもはや貫き通せない摩滅した弓矢のようになってしまうだろう。それでもなお、訓戒に一定のほどよい真剣さが伴っているのなら、それは決して退けるべきものではない。そして、かりに子どもが大人の言うことに逆らって振舞った場合でも、われわれが彼らに真剣に不満を表明するなら、子どもらは少なくとも自らが犯した過ちを本気でわれわれが嫌っていることを目にするようになる。所詮どんな訓戒を与えても、子どもには少しも効き目がないと父母や教師、それに説教師が嘆いている声をしばしば私は聴いてきた。私は思うのだが、そういう結果にならざるをえない本当の原因は、彼らが適切に強い調子で訓戒を行なえていないことにあるだろう。あなたがたは徳性や行儀について、真面目な様子を装ったり、ときには泣いてみせたりしてわが子に訓戒する。だが、おそらく実際は、本当に真剣だということをきちんと示す努力があなたがたに欠けているために、功を奏していないのである。あなたがたはただ子どもの過ちを叱るだけで、その振舞いをしっかりと見守っていないのであり、あるいは子どもが犯した過ちを知っているのに庇い立てをしたり、意外にも大目に見るかしてしまうのであり、そのいずれかなのである。そうしたやり方では、訓戒を与えてもいつまで経っても効き目が現れないままなのであり、たとえいくら訓戒を繰り返したところで何の成果もえられないであろう。とはいえ、訓戒はしかるべき力強さで行使され、子どもの心に留めさせるやり方をするなら、彼らの心情の奥底にその記憶が長く残るはずである。「信心深くしなさい」「行儀よくしなさい」などのありふれた訓戒は、一度きりでは心情に変化をも

たらさないにしても、われわれが要所要所でそれを持ち出すことをいつもわきまえていさえすれば、訓戒を繰り返すことによって最後には所期の願いは遂げられるのである。その効果は水滴の作用にも似ているだろう。一滴では、石に痕跡を残すほどの変化も与えられないが、数多くの水滴が一箇所に滴り落ちるなら、ときが満ちれば石に穴をも穿つ効果をそれは発揮しうるのであるから。

「さて、このことから分かるのは、われわれがときおりは訓戒によって子どもの心を打つように心掛けなければならないということである。だが、そこで気をつけなければならないのは、こうした訓戒はわれわれが本当に真剣にその問題に取り組んでいることを子どもが容易に理解できるように——それは訓戒のやり方においても、期待する効果の面でもだが——十分な配慮を施して行なうべきであるということである。」

その際に遵守すべき最も重要なことは、子どもに対応するそのときの彼らの心情の状況に、このような言葉を用いてよいなら、心を配ることである。人はいつでも同じように訓戒を受け入れるのに適した心的状態にあるわけではない。同じ言葉を使ってもあるときは人の胸を打つことができるのに、別の場合には何の感銘をも与えないことがある。われわれはこうした子どもの状態の、またとない好機を逃さずに活かすようにしたり、できる限り子どもが受け入れやすいような準備を十分に行なって臨むようにしなければならないのである。

次に、根拠を示して行なう訓諭に関して述べるなら、子どもがまだ根拠を理解しうる悟性能力を獲得する状態にまで達していない間は、これらの訓諭を用いることはできないという点にまずは注意が払われるべきである。だが、その時期が来たのであれば、われわれはすべての諸徳性に関して事柄の本質から導き出される正しい根拠をきわめてはつきりと彼らに明示してやらなければならない。もとより、人がきわめて厳密に議論の筋道に沿って推論を正しく導くことができたり、理性の要求にいつでも完全な承認を与えたりできるようになれば、「論証的もしくは数学的教育法」が道徳の育成にとって最善であることは争う余地がないだろう。しかしながら、さほど深く考えなくても、実際にはそうした論証的な方法がしばしば役に立たないということを、当然人は知っておかなければならない。われわれがそこで導き出される推論に対して——だからまたそれに基づいて導出される結論の諸命題に対して——何も異議を唱えられなくなることはしばしば人が直面することであり、そのような場合には納得がいけない結果で終わってしまう事態が生じることになる。なぜそうなるのかと言え、誰かから道理を分からせたいと強く迫られる当人にすれば、一切のそれらの命題と推論はただ不快な気分させられる対象に他ならず、

その判断には直観的に確信が持てないからである。それにまた、事柄の内容が当人とはまったく無縁に思われる場合も、直ちにそれに異議を唱えてよいか判断がつかなくなるであろう。さらにまた、即座にその場で疑義を差し挟むことができず、後から異議を唱えることになるかもしれないと思われる場合にも、そこで完全な同意を与えるのが憚られることになるのである。このように、一つの事柄をめぐって対立し、たとえ説得力のある論拠を提示しても、反対者が納得せず争いとなることはしばしば見うけられることなのである（それゆえ、私がここで述べていることについても多くの事例を引き合いに出して説明を重ねることができなければならないだろう）。いずれにしても、このような理由から、私は一般に子どもに道徳を教えるには、数学的〔論証的〕な方法よりも「ソクラテス式教育法〔問答法〕」が望ましいと考えている。とはいえ、子どもが成長を遂げた後に論証的方法を活用することはできるのであり、それをまったく排除するというわけではない。

さて、このソクラテス式教育法の真価は、次のところにあるだろう——われわれはこの方法によってつねに相手自身の感受性を尊重して指導し、たえず彼自身によって考えさせ判断させるということ、そしてわれわれはただ適切な素材を相手に手渡すように努め、そして彼が誤った判断に落ち込まないように見守ってやる、ということにあるのである。このことから、正当にもこの教育法は思考を産み出す産婆術の名で呼ばれている。というのも、教師は一人ひとりの考えるという活動の誕生に関わり、それを各自が明瞭に言葉で表現するのを手助けする役割を担うからである。例えば、私が誰かに対して「節度」は徳性であることを説明しなければならないとする。その場合に、最初にまず私は、この徳性概念に関する相手の理解の状態を確かめ、その後で彼がその徳性概念を確定できるようになるまで秩序立てて思考を推し進めるのを手助けしてやる。この間、私は彼の答えるべき問いを繰り返し投げかけ、節度についての彼自身の考えを追求させることになる。そして最後には、彼が自分で節度と徳性との二つの概念の必然的な関連について理解できるころまで導いてゆくのである。この教育法について知識がなく理解の及ばない人がいれば、プラトンやクセノフォン<sup>(13)</sup>が著しているソクラテスの対話篇だけでも読んでみるとよいだろう。教育と関わりのある誰もが、日夜それを繙いて読むべきものと私は思っている。

「このようなわけで、われわれが真実の根拠を示して子どもに何かある徳性を推奨したいとき、または何かある悪徳を嫌悪させたいと思うときには、いつでもまず第一にこのソクラテス式教育法を用いるものとしておくべきだろう。子どもが理性的推論を正しく理解する力を持つようになれば、われわれはまた後になってその同

じことを数学的〔論証的〕な方法によって説明することができるし、そして最後にはまた経験を通して——言い換えれば実例の体験を通して——美德の素晴らしい影響と悪徳の弊害とを明示してやれるのである」。その際に、たとえ一つの事柄について幾度となく説明を繰り返すことになっても、決してそれは多過ぎるということにはならない。より多くの根拠を引き合いに出せば出すほど、正しい根拠の一つひとつが何らかの新しい知識を教えてくれるのであり、そうすることで子どもはますます徳性への是認を強めるようになることであろう。

ところで、根拠に基づいて子どもを導く方法に関して触れておくべき一般的事項として、私にはまだ述べておきたいことが一つ残されている。それは、このやり方を用いる際には、「偽りの根拠」や「不十分な根拠」によって子どもを導かないように、とりわけ細心の注意を払わなければならないということである。このことはきわめて重要な留意事項の一つであるので、のちにも再びまた取り上げる予定である。

われわれが何かを子どもにさせたいとき、あれこれと言って聞かせた後、それで子どもに不服な様子が見えない場合には、すべて物事がうまくいっているとの錯覚を誰もが持ちやすい。だが、〔そこで注意してほしいのだが、〕人びとが子どもを説得したいときに持ち出す種々雑多な偽りの根拠は、人びとに広く伝播しやすい偏見を生じさせる最大の源泉なのである。一つの例えを挙げるなら、子どもは音がして何かが聞こえたと思ったら、しばしばそれをそのまま本当のこととして信じてしまう。子ども自身に自分で何が起こったかを調べて確かめる力がないのなら、自ずとそうになってしまうしかない。そこでこの〔偽りや偏見を受け入れやすいという子どもの〕問題に関して、私はいくらか詳しく説明しておくことが必要ではないかと思う。ただ、悟性に納得すべき理由を供してくれる根拠については既に上述しておいたので、ここでは人間の意志の働きに関わる根拠についてだけ触れておくことにする。

私が「偽りの根拠」と呼ぶものは、それが論拠づけるべき事柄と関係づけが明確でないままに示されるか、誰かから伝え聞いた偏見に基づいたままに関係があるとして示されるか、さもなければまったくの虚偽や偏見であるにもかかわらず何らかの事由として示されるか、そのいずれかの形でなされる理由づけのことである。他方で「不十分な根拠」とは、立証すべき命題と多かれ少なかれ関係がなくはないにしろ、それが人の意志に働きかけて行動へと導くためには十分と言えない形で示される理由づけのことである。まずはこの両概念について、事例を挙げて説明しよう。人が子どもに対して、「お前はとても素直な子でなくてはならないよ。言う通りし

ていれば、とても大きくなれるのだよ」と言う場合、人が子どもに示している根拠は、完全に偽りである根拠と見なされる。というのは、成育を遂げて大きく立派になることと、素直であることとはいささかも関係はないからである。それだから、子どもは素直だからよく育つとか、素直でないから育ちが悪いと見なすことはできないわけである。また、私が誰かに「素直な子でいなさい。言う通りしていたら、綺麗なドレスをあげることにしよう」と言うとしたらどうだろうか。だが、この場合もまた、偽りである根拠を子どもに与えたことになる。ただ、こちらの事例の場合は、対応する二つの事柄の間に何らかのつながりのある類例が考えられないわけではない。というのは、しばしば大変弱気になった父母たちが、かわいい子ども服を与えてわが子を褒めてあげたいと思うことはよくあるのだから。しかし、そうだとすると、この両者〔子どもの徳性と子ども服〕の関係づけはある偏見に、つまりかわいいドレスを真正の財物と見る偏見に基づいている。だが、その見方は明らかに理性に反した考え方なのである。あるいはまた、偽りの根拠とは作り事や迷信を伴った根拠づけのことである。例えば、「お前が信心深くしないなら、オオカミか黒魔術師か、はたまたそんなからかいのずっと上手な道化役者をここに連れて来させるよ」、という言い方がそれである。他方で、次のような事例ではどうだろうか。勤勉に努力して人より秀でることに関して、「そうすることは他の子に勝<sup>まさ</sup>ることで得意になれるのだし、あるいは褒められて面目が保たれることになるのだから」と、この種の理由を挙げてわが子に勤勉を強く勧める大人がいる場合である。だがしかし、この事例の理由づけの場合は、「不十分な根拠」と言わなければならないだろう。そのようなときには、人は勤勉であるべく努力することによって、より完成した人間へと少しずつ近づいていくことができるのだと説明するのがよいのであり、このようにして真実で妥当性のある根拠をしっかりと示すようにするならば、正当でもあり実際に有益でもある対応のし方になりうるのである。

以上に見たように、子どもの未熟さを利用して彼らを導こうとするやり方がいかによくない結果をもたらすかは、誰にでも容易に理解できることであろう。なぜなら、そうしたやり方は善悪の判断に関わって有害な偏見を生じさせることになるからである。例えば、子どもの欲しがる物に対して彼らの虚栄心を刺激するやり方は、実際以上にそれに値うちがあると思込ませて無性に欲しがらせる結果を招いてしまう。その挙句には、迷信を子どもの内面に植えつけてしまうことになり、そしてたいていは多くの事柄についてまったく間違っ<sup>まちが</sup>た概念を与えてしまいかねないのである。しばしば子どもがひ弱な悟性しか持たないために、ある時期その種の間違っ<sup>まちが</sup>た根拠が彼らの心をとらえるとしても、そのうち悟性が育ってくれば、それも消え

去っていくであろう。また子どもが大人になり、そのような根拠の浅薄さを識別できるようにになれば、そうした迷信めいた理屈による影響もなくなっていくものである。しかし、〔だからといって、大人の無思慮な対応が許されてよいということではなく、〕上述のやり方が原因で子どもが真反対の方向へと導かれてしまうことは少なくないのである。子ども時代に迷信によって宗教へと導かれた多くの人間が、どうして成長を遂げた年齢になって宗教そのものへの嘲笑家になってしまうかの理由について、ここで深くは詮索しないつもりである。少なくとも私は、すべての義務や徳性に対して嘲笑し侮蔑する者の多くが、〔分別の欠如した大人によって〕誤って導かれたために大きく躓いてしまったものと考えている。人は一般に、その幼年期に徳性や義務について、または神聖な事柄について大人がいろいろと話すのを聞くことになる。しかしながら、子どもが確かめるために供される根拠は、総じてどれも皮相的で、迷信が多く、滑稽さに満ちたものをたくさん含んでいる。それに対して、いまだ未発達な精神の子どもの場合は、そこからさらに物事を深く調べてみようとしたりはしない。義務の観念が働いて彼の情念を邪魔しようとしないう限り、子どもはそのことで何も不服に思うことはないからである。けれども、〔子どもの誰もがそうなのではなく、〕彼らのある者は物事を多少緻密に考えてみたいと思い、大人が説いてきた義務や徳性の拠って立つ根拠と言われるものが実にいい加減なものであることに気づいてしまう。その結果、彼らは義務や徳性が単なる作り事の影法師に過ぎないとする発想へとたどり着いてしまうというわけなのである。

それだから、われわれが十分に注意を払うべきなのは、主張の裏づけがはっきりしているか、今後さらに一段とはっきりしたものになるであろうと予想される根拠以外のものは、子どもに教えないようにすることである。さらにまた、悟性の育った段階の子どもが自分で物事を調べてみようとする場合には、人間の共通感覚に根ざして妥当と見なしうる根拠以外のものについては、慎重に考慮して与えないようにすることなのである。ただ、このことは、もう既にきちんと根拠の理屈を理解する能力を手に入れている子どもについて言うことである。まだごく小さな子どもを扱うのであれば、彼らが知り行なうべきことをそのまま機械的なし方で伝えて問題はなく、あまりくどくどと根拠を彼らに示すやり方はむしろよくないと考えべきである。このことについては、またのちに改めて述べる予定である。

#### 〔訳注（第5章）〕

- (1) ピロクセノス（Philoxenus of Cythera、紀元前434年頃－380年頃）は、ギリシアの酒神讃歌詩人。キュテラ島からアテナイに渡った奴隷身分の出自であったが、主人であるディオニュ

ソス頌歌詩人の下で詩作の薫陶を受けた。その後シケリアに移り音楽詩人として頭角を現し、宮廷の贅沢などを楽器付き歌唱による演出で風刺した。その代表作には、オデュッセウスによって盲目にされた巨人を題材にした「キュクロプス」などがある。彼の作品は、その頃政治や社会風俗をあからさまに批判していた喜劇詩人アリストファネスの風刺劇にも取り入れられた。

- (2) 既出、I(14)。紀元1世紀後半にギリシアで著述家・哲学者として活躍したプルタルコス。この箇所ズルツァーは、伝記作家としてのプルタルコスを高く評価し、彼の伝記本を優れた教育用の教材として活用する具体的方策を提案している。ここで指摘している著作はギリシア・ローマの主要な歴史上の英雄的人物を描いた『英雄伝』を指しており、アテナイの王テーセウス、スパルタの律法者リュクルゴス、王政ローマを建国したロームルス、マケドニア王のアレクサンドロス3世、ローマ共和政期のカエサルなど古代ギリシア・ローマを代表する人物49名を取り上げ、その内22組の人物を対比する形式で大部の伝記を書き上げている。この著作は16世紀半ばにジャック・アミヨによる仏語訳、16世紀後半にトマス・ノース卿らによる英語訳や独語訳が出版され、17世紀以来熱心な読者にはこれらの翻訳書が入手可能となっていた（なお、本格的な著作選集の独語訳出版は、のちに古典文学研究家のJ.F.ザロモン・カルトヴァッサーが着手する）。邦訳文献に『プルターク英雄伝（1-12）』河野与一訳（岩波書店、1952-1956年）、プルタルコス『英雄伝（1-5）』柳沼重剛・城江良和訳（京都大学学術出版会、2007-2019年）などがある。
- (3) フランソワ・ド・フェヌロン（François de Salignac de La Mothe-Fénelon, 1651年-1715年）はフランスの聖職者、思想家。パリの神学校に学び、修道院の院長に就任後、カトリックに改宗した元ユグノーの婦女子の教育に携わった。このとき『女子教育論』を著し、自然から授かった天性を尊重する教育のあり方を説いた。その後、国王ルイ14世の孫ブルゴーニュ公の教育係（師傅）となり、教訓小説『テレマックの冒険』を執筆した。晩年はルイ14世の治世を暗に批判したことによる失寵およびローマ教皇からの断罪などの不運に見舞われ、逆境に立たされた。静寂主義をめぐるフランス・カトリック教会の領袖で著述家のボシュエから論難されたが、上掲書を含む彼の著作は18世紀の啓蒙知識人に少なからぬ影響を与えている。本書での言及に見られるようにズルツァーも読者の一人であり、彼が自著執筆までにフェヌロンから多面的な刺激を受けていたことがうかがえる。邦訳文献にフェヌロン『テレマックの冒険（上・下）』朝倉剛訳（現代思潮社、1969年）、フェヌロン『女子教育論』志村鏡一郎訳（明治図書出版、1982年）などがある。
- (4) ブルゴーニュ公（Louis, duc de Bourgogne, 1682年-1712年）は、ルイ14世の孫でフランス王国の王太子。彼が王太子になるのは父が死去した1711年であるが、その翌年に病没した。その結果、嫡子のアンジュー公がルイ15世となる。ブルゴーニュ公ルイが9歳のときにフェヌロンが教育係に任ぜられたことが機縁となり、教育小説『テレマックの冒険』が成立した。教え子ルイの古典的教養を深めさせるとともに、啓発された君主のための帝王学の伝授を目的として小説は構想された。著書はルイが17歳時に書き上がるが、十余年後に彼は王太子になれたものの政務に携わることなく死去した。
- (5) サミュエル・リチャードソン（Samuel Richardson, 1689年-1761年）が書いた『パミラ、あるいは淑徳の報い』は、2巻から成る構成でロンドンにおいて刊行（1740年11月）され、翌年までに増刷を加えて第5版を数えた教訓小説。売行きもよく好評だったため、翌年にフランス語訳が出されたほか、著者自身によって続編が企画され、再び2巻から成る『パミラその後』が出版（1741年12月）された。作品では数々の誘惑に遭遇しながらも妥協を許さず

に淑徳を貫く女性を描く。聡明な貴婦人へと成長を遂げていく若き娘パミラの姿には、啓蒙時代の知識人が追い求めた女性の理想像が表現されている。訳文中にある第4部とは、最初の2巻と後続の2巻を合わせて全4巻となった版の最終巻を指す。邦訳文献にはリチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』原田範行訳（研究社、2011年）がある。

- (6) 文中で後ほど示すと述べている「範例」とは、子どもの心情に働きかける訓諭の叙述箇所であり取り上げられているアメリカ・インディアンの勇敢さの事例を指すと思われる。
- (7) ルキアノス（Lukianos, 120年頃～180年頃）はローマ帝政期のギリシアの風刺作家。シリアに生れ、ギリシア語と修辞学を学び、弁論家としてギリシア、イタリア、ガリアを旅して見聞を広げた。40歳頃アテナイに定住し、対話または手紙形式で、世の中の愚行や迷信を風刺・批判する作品を数多く著した。その諧謔にとむ皮肉・風刺は哲学や宗教にも及び、傑出した自由な作風は近代以降多くの作家に刺激を与えた（ズルツァーが本著「序文」で引用した『ガリヴァー旅行記』の著者スウィフトもその一人である）。代表作として『本当の話』『ペレグリーノスの昇天』『神々の対話』『死者の対話』などが挙げられる。邦訳文献にルキアノス『本当の話－ルキアノス短篇集』呉茂一訳（筑摩書房、1989年）、ルキアノス『神々の対話 他6編』呉茂一、山田潤二訳（岩波書店、1996年重版）、『ルキアノス選集』〈『死者の対話集』を収録）内田次信訳（国文社、1999年）などがある。
- (8) ベルナル・フォントネル（Bernard le Bovier de Fontenelle, 1657年－1757年）はフランスの哲学者、文学者。アカデミー・フランセーズの会員。悲劇作家ピエール・コルネイユの甥。数多くの詩、歴史書、小説などを雄弁に著した。有名な著作には、ルキアノスの対話書を想起させる『死者との対話』や、コペルニクスやデカルトらによる自然学の新しい知識の平易な解説を試みた『世界の複数性に関する対話』、超自然的な奇跡や神託への迷妄を批判的に分析した『神託の歴史』などがある。フランス近代文学を代表する作家の一人として、自国の啓蒙思想の普及・発展に深く関わる活躍をした。邦訳文献にはフォントネル『世界の複数性についての対話』赤木昭三訳（工作舎、1992年）、フォントネル『哲学者の国またはアジャオ物語』（『ユートピア旅行記叢書第4巻』所収）赤木昭三訳（岩波書店、1998年）などがある。
- (9) ここでは、ローマの詩人作家であるパエドルス（Gaius Julius Phaedrus, 前20/15年－後50/60年）の寓話から引用されている。『解放奴隷パエドルスによるイソップ風寓話集』第二巻の初めに置かれた「ライオンと旅人」（原典標題は「ウシとライオンと泥棒」）の寓話では、一人の旅人が憤み深く謙虚であるという理由で称えられる。空腹のためウシを仕留めて食べようとするライオンに遭遇し、厚かましくも半分よこせと言いはる欲張りな泥棒と、ライオンを見てあつさりする正直者の旅人を対比させるこの寓話では、控え目な旅人の憤み深さがライオンの頑なさを和らげ、その謙虚さに見合う分け前を手中に入れるという筋立てとなっている。また、『寓話集』第三巻の「神々の鼻屑の木」では、名誉を気にするあまり樅の木、ギンバイカ、月桂樹、松、ポプラのような果実のならない木ばかりを鼻屑にする神々に対して、それに疑問を抱いた女神のミネルウァが「実のなるオリーブ」を挙げて敢えて異を唱える。そこで神々の父は、「実のあることをしないで自惚れている」神々は愚かだと裁定し、名よりも実利を説いたミネルウァの聡明さを褒めるという内容である。パエドルスの著作の邦訳文献には、パエドルス／バプリオス『イソップ風寓話集』（『叢書アレクサンドリア図書館 第10巻』所収）岩谷智・西村賀子訳（国文社、1998年）がある。
- (10) この段落最後の一文は、この段落における論述の展開をより分かりやすくするために、三つ前の文（センテンス）の位置からこの位置へと移し替えた。

- (11) 注(2)でも触れたリュクルゴス (Lykurgos) は、古代ギリシアの優れた律法者。前9 - 前8世紀頃に、各地の国制を研究したのち祖国へ帰り、スパルタの国制の基本を規定したとされる。ヘロドトス、プルタルコスらが自らの歴史書でその名を挙げて称揚した。彼の行なった改革には、男子の若者に集団寄宿生活による厳しい訓練を施したり、仲間と夕食を共にする共同食事の制度を設けるなど、集団を活用した鍛錬主義の教育観が認められる。
- (12) 原語は *argumenta ad hominem*。本著執筆当時、ズルツァーがD. ヒュームの著書『人性論（第1～3篇）』（1739-40年）、『道徳政治論集』（1741年）に深い関心を寄せていたことを重ね合わせれば、「人間本性の論証」と訳語を当てたここでの意味は、経験論的認識を人間存在の基盤と見る立場から導かれた人間本性の論拠づけの意と解される。
- (13) 既出、I(9)。クセノフォンは傭兵部隊の退却行軍を指揮した戦記『アナバシス』を著した軍人著述家として知られるが、他方で彼は弟子として身近で知りえたソクラテスの言行を回想して記録を残しえた、哲学史における重要な証言者でもあった。その代表作には『ソクラテスの思い出』『饗宴』『ソクラテスの弁明』などが挙げられる。邦訳文献にクセノフォン『ソクラテスの思い出』佐々木理訳（岩波書店、1953年）、クセノポン『ソクラテスの弁明・饗宴』船木英哲訳（文芸社、2006年）、クセノポン『ソクラテス言行録 1』内山勝利訳（京都大学学術出版会、2011年）などがある。

原典：J.G.Sulzer, *Versuch von der Erziehung und Unterweisung der Kinder*, zweite, stark vermehrte Auflage, Conrad Orell und Comp, Zürich 1748. (Kapitel 5, S.105-127.)